

言語学方法論としての「温新知故」

— 古典ギリシャ語 ϕ 、 θ 、 χ は
真に帯気音だったのか、など —

田 原 薫

1. はじめに

言語学の分野で「比較言語学」(comparative linguistics) と言えば、異なった言語を比較対照して論じること、と門外漢は誤解するが、そちらは「対照言語学」(contrastive linguistics)と呼ばれていて、「比較…」の方は実は「比較研究によって同系統(と推定される)言語の共通の祖先(祖語)を推定復元し、それに基づいて問題の言語の現在の状況(音韻・語彙形態・文法など)を説明し、納得する」という営みであることは、言語学をすこし学んだ人には常識である。従って比較言語学は「温故知新」【故(ふる)きを温(たう)ねて新しきを知る】の営みであると言えるが、その「温故」すなわち「古き状態の尋ね方」が問題であって、現今と違って録音テープが残っているわけではないし、音声学也未発達だったから音声に関する詳しい調音法の記述が残っているわけでもない。記述があるにしても単に印象的なものなので、「温故」自体が「温新知故？」の営みの成果でもある。

たとえば印欧語比較言語学で有名な「有声有気音」という子音の系列、 b^h , d^h , g^h と表記される音の真の音価の問題である。この中の有気(或いは帯気)の部分が無声有気音(この場合はむしろ帯気音と呼ぶ方がふさわしい) p^h , t^h , k^h の帯気の部分と同じ生理現象と聞こえに対応するとは到底言えない。もしそのように完全に無声の h に当たる音がある有声の部分に後続し、その h にさらに母音が後続した $b^h a$, $d^h a$, $g^h a$ といった音連鎖が生じたとすると、有声閉鎖部と有声母音との間に無声の h が介在して亮度(聞こえ)が分断されることになり、すなわち件の音連鎖は2音節ということになってしまう。これを避けるには上記の子音の帯気部は有声(つまりmurmured release) でなければならないことになる。実際、ヒンディー語では口腔での閉鎖中すでに声帯は囁きを発する(声門の前部つまり喉側だけが少しだけ開いている)態勢を取っており、そこから有声部(母音や流音)に移行すれ(つまり左右の声帯が狭く開いて呼気が通過する際に振動するようになれば、その際に一種のしわがれ声のような渡り音(つまりmurmured release)が生じるが、その閉鎖と開放の全体が b^h , d^h , g^h の正体である、と音声学者Ladefogedは述べている。だからそんな b^h , d^h , g^h を無声の p^h , t^h , k^h とペアを組ませて「有気音/帯気音」などの概念/名のもとに一括するのは、非科学的で無理な話なのである。

ところで、仮に印欧祖語の b^h , d^h , g^h がヒンディー語のそのようなものであったとしても、なぜそれが古典ギリシャ語で p^h , t^h , k^h になったか、ということが大問題となる。生理的に全然違う機構の音なので、単に無声化した【そう片づける学者もいる！】、ではすまされないのである。実際、それらの系列は Φ , Θ , X と書かれる音になっており、現代ギリシャ語ではそれぞれ摩擦音 $[\phi, \theta, x]$ の音価に変わっている。【國際音標IPAは現代ギリシャ語のこれらの音価に基づいてそれらの記号を制定したのである】それらの文字は古典時代から今のように発音されたのだ、という見解もあろうが、少なくとも私は別の見方をしている。そのことも含めて私の古音推定の過程などを論述してみたい。

2. ガムクレリーゼラの「声門説」の衝撃

幾多の矛盾を抱えながら惰性と権威とによって一見平穩を保ってきた印欧語学に、近年最も衝撃を与えたのは Gamkrelidze & Ivanov [1984] の「声門説」 'glottal theory' である。従来、印欧祖語の破裂音（閉鎖音）の体系は次のようである、と考えられてきた。

I (b), d, g, g^w 【有声無気音系列、それぞれ唇音、歯音、喉音、喉唇音】

II b^h , d^h , g^h , g^{wh} 【有声有気音系列、それぞれ唇音、歯音、喉音、喉唇音】

III p, t, k, k^w 【無声無気音系列、それぞれ唇音、歯音、喉音、喉唇音】

ところが、類型学的に有声無気音系列で最も無徴(unmarked)、換言すれば最も出現頻度の高い筈の b を含む形態素が祖語に見つからないことから、学者たちは悩んできた。一方、この系列で最も有徴的(marked)なのは (g^w も含めて) g であり、たとえばオランダ語では $[g]$ は $/k/$ に属する異音としてのみ現れ、独立に音素化されていない。だから音素 g をもつ言語で音素 b をもたないような言語はない、というのが language universal の通則であるが、印欧祖語はその通則に反していることになる。

以上のような難点を G & I は、特徴的性格を次のように別様に解釈することによって見事に解決した。すなわち、

①第 I 系列は声門閉鎖音であり、従って当然無声である。声門閉鎖音というのは声門を閉じ（つまり左右の声帯をくっつけ）、一方で口腔内で p , t , k , … に相当する閉鎖を作り、上下の閉鎖によって空気を貯めた密室を作る。ついで声門をピストンのように押し上げて密室内の気圧を高めてから、口腔の閉鎖を解き、声門の運動によって空気を押し出すことによって発する破裂音である。音声記号では $p^?$, $t^?$, $k^?$ … と書かれる。

②第 II 系列は通常の有声音であり、murmured release を伴うかどうかは異音の問題である。

③第 III 系列は通常の無声音であり、帯気 (h) を伴うかどうかは異音の問題である。

第 II 系列における murmured release および第 III 系列における帯気性は弁別の特徴でない、としつつも、G & I はそれらを伴う方が無徴の実現だ、と言っている。しかし私の見解は違う。帯気存在は破裂前の閉鎖の無声性を含意し、murmured release の存在は破裂前の声帯の接近を含意しているから強い呼気は漏れない。従って無声破裂音の場合は p^h , t^h ,

k^h が無徴、有声破裂音の場合はmurmured releaseのないb, d, gが無徴となる。そのことは奇しくも（デンマーク語以外の）現代のゲルマン諸語の事情と一致している。

何はともあれ、印欧祖語に旧表記でb, つまりp[?] がなかったことは、発音の有徴性すなわち困難さに還元して説明がつく。p[?] では声門と両唇で作る密室の容積がt[?], k[?] の場合より大きいので、中の気圧が高め難く、発音者をより疲れさせてしまう。だからこういう音類はだんだん忌避されるようになった、というのが説明である。

以上概要を紹介した 'glottal theory' によってれいの破裂音体系を書き直すと：

I (ㇰ), t[?], k[?], k^ʷ 【声門閉鎖音系列、ㇰㇰ唇音、ㇰ音、ㇰ音、ㇰ唇音】

II b, d, g, g^ʷ 【声門狭窄音系列、ㇰㇰ唇音、ㇰ音、ㇰ音、ㇰ唇音】

III p, t, k, k^ʷ 【声門開放音系列、ㇰㇰ唇音、ㇰ音、ㇰ音、ㇰ唇音】

という体系になる。これを有声／無声の対立から見ると、IとIIIが無声、IIだけが有声ということになって、有声／無声の対立×有気／無気の対立、といった2次元の組織の解釈からは退歩したかのように感じられるが、もともと3つしかない要素を2次元に組織化するのは余計な煩雑化であろう。冷静につぶさに観察すれば、I II IIIの系列進行は実は声門の開きの進行に比例したものであることがわかる。すなわち声門の開きゼロ（I）から、声門の（声帯振動が可能なほど）狭い開き（II）、そして声門の（声帯振動が不可能なほど）広い開き（III）に対応した子音の実現がI II IIIの系列の並びになる。だからこれは1次元の組織であり、無声という特徴でIとIIIを一括するようなことは不合理である。またII有声音の系列は、声門の開きが適度の場合のみに現れるスペクトルの一部にすぎない。いわば、紫外線－可視光線－赤外線の関係に譬えられよう。

ところで、G&Iの「声門説」の効用は、従来の学説では不可能であった、印欧祖語の語根のレパートリーを制約（制限）する、子音の可能な組み合わせに対する説明にも及んでくるが、これはかつて田原(2001)で述べたのでそれを参照されたい。

3. 印欧祖語がどうしてギリシャ語になったか

表題の疑問はもちろん音声面に関しての疑問に留まるものであるが、IIIの系列はそのまま無声のπ, τ, κに対応、つまり恐らく移行している（ただ、有気の異音を廃用した）のであまり問題はない。ただし、喉唇音のk^ʷ はギリシャ語特有の変化を蒙っている。疑問詞いわゆるWh語は語頭にこの音をもっていたのであるが、ギリシャ語ではたとえばποι（どこへ：Lat. quo）, τίς（どれ、どの【辭註】：Lat. quis）のように、唇音や歯音に変わっている。恐らくk^ʷpoi, twisといった中間段階を経てであろうが、今はこの問題に深入りしないでおく。【また、ギリシャ語はなるべくローマ字化して表記することにするが、やむなくギリシャ文字で表記する場合は印刷の便宜上、母音字に付属するアクセント記号と無気音記号を省略し、有気音記号のみ^{◌̣}として表記することにする。】

次に、第I系列であるが、そのt[?], k[?] はそれぞれ有声音d, gになった。…と言

えば、もし第Ⅱ系列の有声音がそのまま変化しなければ二つの系列が融合することになり、（事実スラブ語派などではそうだったのであるが）それで大丈夫なのか心配になってくるが、ギリシャ語では第Ⅱ系列のもと有声音が伝統学説上のいわゆる「無声帯気音」 ϕ , θ , χ に変わっている。これは極めて不自然であり、伝統学説は再検討を迫られてくる。

4. 伝統学説上の「無声帯気音」の正体 — 破擦音ではなかったか

この節の表題が今回私が主張するメインテーマの一つなのであるが、とにかく ϕ , θ , χ で表記される音が「無声帯気音」つまり閉鎖の開放に際して明瞭なh音を伴うp, t, kであった、という伝統学説の主張は、祖語での有声音すなわち声門狭窄音が、無気の π , τ , κ （無声音すなわち声門開放音のうちでも開放と同時に声帯が振動し始める音）を飛び越えて、声門開放が口腔開放後も（最も）長く残る帯気音に変わる、というわけだから、ちょっと信じ難い。

もしここで伝統学説に反して ϕ , θ , χ の音価がそれぞれ[p ϕ , t θ , k χ]といった破擦音だったと仮定すると、口腔的閉鎖の開放は後続する摩擦音成分によってブレーキを掛けられるから、それだけ緩やかなものとなる。これなら、声帯振動によって呼気の勢いが弱められる有声音との共通性があり、いくぶん納得し易いであろう。また、破擦音の頭の閉鎖子音が弱化して脱落すれば、現代ギリシャ語の音価にも変わり得る。

古典ギリシャ語で文字 ϕ , θ , χ を含む形態素には、ギリシャ語という言語が成立してから独自に誕生した（或いはsubstratum言語から来た？）、説明の付けにくいものもあるが、比較的説明のつき易いものに2つの系統がある。一つは印欧祖語との関係が明瞭で、その祖語に由来すると目されるものであり、もう一つは「接頭辞の末尾音+語本体の初頭音」の融合や相互干渉によるものである。後者の場合はその「語本体の初頭音」というのが母音の前に立つh音だった、という伝統的学説に則ると「 ϕ , θ , χ 帯気音説」の有力な証拠になる、と旧弊な学者は主張するであろうが、実は2つの現実によってそんな主張は効力を失っている。1つは、接頭辞のfull formがapo-, epi-, kata-, meta-, hypo-などであって、決して子音が末尾音でないことである。だからたとえばmeta-hodosであればhは母音に挟まれた位置にあるから脱落する筈であり、methodosにはならず、'method'という英単語も生まれず、それは'metod'となっていたかもしれない。もう一つは、有気記号がh音を表わすといっても、それがまだh音でなかった前史がある筈であり、おそらく上記のような接頭辞との結合は、h音でない前史の段階で起こった（少なくとも起こり得た）と考える聡明さ／慎重さが学者たちに欠けていることである。その「まだh音でなかった前史」段階での音価を私はスウェーデン語の[ɧ]に近似した「三所攻め」摩擦音と推定しているが、この話は長くなるので節を改めて述べることにする。

さて、「印欧祖語の第Ⅱ系列の有声音b, d, g（新説）がなぜ無声破擦音[p ϕ , t θ , k χ]（私の主張）になったか」という問題に向き合わねばならない。だがこの問題は第

Ⅱ系列だけを考えていても解ける問題ではなく、第Ⅰ系列と第Ⅲ系列を巻き込んで破裂音体系を全体的に見直さなければ解けない。

5. 体系は或る趨勢に流されて全体的に変化する

もちろん散発的で特定の音声だけを襲う音変化の存在を否定するものではないが、表題のようなテーゼは言語学を進める上で大切な作業仮説と言えよう。とすると、印欧祖語からギリシャ語が誕生した際に起きた子音体系の全体的変化はどういうものであろうか。

ここでその「全体的変化」の結果を一覧表にして掲げてみる。ただし、印欧祖語の第Ⅱ系列と第Ⅲ系列については、それぞれの無徴の実現は有声無気音および無声帯気音であったと考えておく。また唇歯音についてはギリシャ語独自の変化を受けたので省略する。

Ⅰ (知), tʰ, kʰ → ※, d, g (※ギリシャ語に b が発生して穴を埋めた)

Ⅱ b, d, g → 想定中間段階(複数?) → [pʰ, tʰ, kʰ]

Ⅲ pʰ, tʰ, kʰ → p, t, k

のように一覧表はなるのであるが、やはり第Ⅱ系列は出発点と到着点の差が大き過ぎて、途中に中間段階を想定しないとうまく説明できないことがわかる。

そこでⅠとⅢの変化に共通する全体的傾向は何か、と見ていくと、それは口腔閉鎖／開放の動作に対して相対的に声帯の振動の開始が早まっていることだと気づく。まずⅠでは祖語の段階では声門が閉じられていて、口腔閉鎖中は声帯はまったく振動しない。口腔開放と同時に声門も少し開かれて、後続する母音または流音（有声音）の段階になってから声帯は振動を始めた。この調音法が変わって、口腔閉鎖中に声門が少し開いて声帯振動が開始され、続く母音／流音になって大きく振動するようになるのが有声音 d, g なのである。次にⅢの変化はこうである：祖語の段階の帯気音は声門の広い開放が口腔の開放の後も暫く残り、そこで h 類似の気音が発生するが、後続する母音／流音の段階で声門が少し狭まり、その段階で声帯振動が始まる。こういう体系だったものが、ギリシャ語になった段階で声門が口腔開放と同時に狭められるようになり、h 類似の気音が発生しないうちに後続する音声の調音に移っていく、つまり無声無気音になったのだ、と考える。

このようなⅠ、Ⅲ系列の変化をⅡにも敷衍すると、「想定中間段階」は b, d, g の通常の調音よりも声帯の振動を早めた調音をする音だと考えてよいであろう。しかし b, d, g では口腔閉鎖中にすでに声帯振動は始まっているのであるから、それを更に早めろといわれてもどうすればいいのか？ — 答は、口腔閉鎖の準備段階つまり口腔閉鎖動作中にすでに声帯の振動が開始される、と考えることにある。これだと声帯が振動し始めた時にはまだ口腔閉鎖が完了していないわけだから、b の前に [β], d の前に [ð], g の前に [ɣ] という有声摩擦音が先取音 (preemptive sound) または予兆音として発生するわけである。こうして想定中間段階（複数）の第 1 段階は ^βb, ^ðd, ^ɣg が措定された。

さて想定中間段階は第 2 段階に進むが、第 1 段階でできた ^βb, ^ðd, ^ɣg は第Ⅰ系列の

d, g, そしてギリシャ語段階で新たに誕生したbとは、先取音としての摩擦音を伴うかどうかで識別されることになる。この弁別特徴が次第に強調されるに及んで、本体である \bar{b} , \bar{d} , \bar{g} の部分の閉鎖圧力が緩んで閉鎖に隙間が生じてくる。そうすると本体の後にも牽跡音(trailed sound)としての摩擦音が発生し、 $^{\beta}b$, $^{\beta}d$, $^{\gamma}g$ はおそらく $^{\beta}b^{\beta}$, $^{\beta}d^{\beta}$, $^{\gamma}g^{\gamma}$ という異音をもつことになるだろう。これが想定された第2段階である。

次に想定 of 第3段階に進むが、純粋な破裂音との間の弁別特徴は要するに摩擦音を伴えばいいのであるから、上記の音韻は b^{β} , d^{β} , g^{γ} という実現ももった筈である。これを第II系列の第3の中間段階と想定しておく。こうして中間段階で有声摩擦音ができが、これが最終段階すなわち無声の[p ϕ , t θ , kx]へ変わる契機と圧力になったのは、別のルートで上記の無声摩擦音がすでに体系内にできていたことだ、と考えられる。

6. 無声摩擦音発生 of 解釈 of 鍵 — 「三所攻め」摩擦音 Sw.[ς]

前々節で、無声摩擦音には、おもに接頭辞の末尾音+語本体の初頭の'h'から発生するものがあることを述べた。そして語本体の初頭の'h'は、それらの複合語ができた当時はまだhになっていなかった可能性もある、ということも指摘し、そのヒントとして「三所攻め」摩擦音[ς]にも言及しておいた。さらに接頭辞の末尾音というのが真の末尾音でなく、実は末尾の母音を省いた最後の(無声)子音であることも指摘しておいた。実際、一つ前の子音にたとえばrのような流音をもつ接頭辞 peri-であれば末尾母音は脱落せず、逆に h-の方が消えている。たとえば peri-hodos → periodos であり、これから英語の 'period' も由来した。因みに hodosは「道／行くこと」であり、periodos の意味は「回路／ぐるりと(一回り)行くこと」である。hod-は印欧祖語 \sqrt{yed} に由来し、ロシア語の ИДТИ(行く—特定の目標に向って) / ХОДИТЬ(歩く、往復する、通う)と同根である。【ただし \sqrt{yed} は旧来の表記であり、 \sqrt{yet} とすべきであるが、今は些事を問わない】

上述のhod-の話から、ギリシャ語の有気母音の有気成分が祖語の半母音y-から来ている場合があることがわかったが、もう一つ興味深い'hora'の話をしてよう。これはギリシャ語起源でありながら俗ラテン語を通して現代のロマンス諸語に広く普及した単語で、tempus の意味領域をかなり広く侵食して「時」を意味し、近代概念である「1時間」の意味にもなっている。「もっと演奏を！」とねだる聴衆が発するFr. 'encore', It. 'ancora' の語源は俗ラテン語の ad hanc horam (この時／回まで)である。

さてこのギリシャ語の hōrā は実はゲルマン語の year, Jahr(年)と同源であり、語頭の気音は祖語のy-に由来している、というのが定説だから面白い。こうしてみると少なくとも IE. y-Gr. h の対応があることは否定できない。

もう一つは、ギリシャ語のhがラテン語、ゲルマン語、スラブ語のsに対応する場合が多いことである。数詞の'6'は Gr. hex-Lat. sex, '7'は Gr. hepta-Lat. septem であるし、Gr. homos (同一の)は'1'を表わす語根の一つ \sqrt{sem} から来ていて、英語の same,

some, ドイツ語 zusammen, ロシア語 sam などと明瞭に対応しており、ラテン語の simul-/simile, simplex, semper などにも含まれている。

有気記号[◌]は母音だけでなく ρ の前（上）にも現れるが、この[◌]ρ は無声の[ɾ]になると考えられてローマ字では rh と転写されるのが一般的である。しかしこれは無知な学者の恣意的解釈であって、やはり母音の場合の転写の順序に従って hr と転写すべきであろう。この r の前の h は祖語の s や w に対応することがある。例を挙げよう。

リューマチ、英語では rheumatism という病気がある。昔は血液も含めて人間の体内には4種類の体液が流れているとされ、その一つの rheuma というのが名の由来で、この名称の源になったギリシャ語は[◌]ρευμα であり、「流れ（るもの）」という意味である。-ma(t)は広く使われて中性名詞を作る接尾辞であるが、その前の hreu-の方は印欧祖語で s-r-w の子音枠をもつ語根から来ていて、最初の母音スロットは母音度ゼロ、第2の母音スロットには e が現れた srew-の形から来ている。実はこの形はゲルマン語の語彙素にも深い関係がある。英語 stream, ドイツ語 Strom はゲルマン祖語の straum(az)から来ているが、これは印欧祖語の srow-+m- の形に還元できる。語根の第2の母音が Ablaut で o の音価を取ったのであるが、これはゲルマン語では規則的に a となる。そしてゲルマン語では発音を楽にするために sr-の子音結合は str- に変えられた。

次に、ρ の前（上）の有気記号が祖語の w に対応すると見られる例を挙げる。尤も w 自体はギリシャ語では大幅に退化し、先程の srew-でも srew-it（動詞「流れる」の直説法3人称単数現在）で παντα[◌]ρελ. 「万物は流転す」のように w に相当する音／文字は現れない【因みにギリシャ語では中性複数単数のように動詞と呼応する】。しかし本来は ε と ι の間に w 音を表わす F（digamma と呼ばれ、これからローマ字の F ができた）が挟まっていたとされている。さて本題に戻り、r の前の w の命運の話であるが、rhetoric という英語はどなたもご存じであろう。これは[◌]ρητωρ 「弁論家」というギリシャ語から来ているが、-tōr はラテン語 -tor にも見られるように「…する人」を表わす接尾辞だから、hrē-の部分が問題である。実はこれは古くは wrē- であり、語根は wer- であって「話す／言う」という意味であり、英語の word にもラテン語 verbum にも含まれている。ギリシャ語では w と r の間の母音がゼロ度となり、wr- という子音接触が生じたが、この初頭の w が気音（恐らく無声の[ɾ]に近い）になって残っているのである。

以上の話を整理すると、ギリシャ語の有気記号は h 音になる前に y や s や w、それに r とともに密接な近親関係をもっていて、それらの音声的特徴を多分に残した音だったと考えることができるであろう。そこで「三所攻め」摩擦音[ɬ]が立候補するのである。

7. 「三所攻め」摩擦音[ɬ]の実態

まず「三所攻め(みつこめ)」について説明しておく。これは相撲の四十八手の中にある技の一つであって、百科事典などで見ると、内掛けと、脚取りと、相手の鳩尾(むすし)あたり

に頭突きを喰らわす、という複合技である。難しい条件が三つ重なっているので実現の確率は極めて低く、相撲の三所攻めは實際上単なる理想論に近いが、言語音の調音法としては3重調音というのが実在する。「三所攻め」を「三所狭め(みつ所せめ)」と言い換えればまさにスウェーデン語の[ɣ]の特徴になるのである。

スウェーデン語の[ɣ]は sj, skj, stj などのスプリングに対応する音声として頻繁に現れる。例: sju [ɕu:] 「7」、skjorta [ɕø:'tɑ] 「シャツ」、stjärna [ɕæ:nɑ] 「星」その他 skön [ɕœ:n] 「美しい」、maskin [maɕi:n] 「機械」、passion [paɕu:n] 「情熱」。この音韻の音色にはかなり個人差があり、或る人、或る場合には[ʃ]に近く聞こえるが、別の人、別の場合には両唇音[ɸ]に、時には[x]に似て聞こえることもある。それもその筈で、これは口腔の3カ所に狭窄を作る無声摩擦音だからである。

まず唇に関しては横に広げて間隔を狭め[ɸ]の構えを作る。舌に関しては前後2カ所で狭めを作るが、舌尖では後ろ反り(retroflex)の[r]の形と、奥舌では軟口蓋に向かって高まる[x]の形が作られ、その間を無声の呼気が吹き抜けていくのである。つまり[ɣ]は[ɸ]と[r]と[x]の3重調音の産物なのである。

このような3重調音の音素は、直接先行する音の影響を受けて、3重の調音箇所のうち先行する子音の調音箇所に最も近い箇所が強調され、他の2箇所がやや粗雑に扱われるようになるのが自然である。従ってもし形態素の境界で p-ɣ, t-ɣ, k-ɣ のような子音接触が生じれば、それぞれ p-ɸ, t-r, k-x に近い実現になるであろうし、ɸ, r, x は音素/ɣ/の音声環境による異音ということになる。

しかしながら、問題はギリシャ語の接頭辞(副詞起源)が apo-, epi-, kata-, meta-, hypo- などであって、ap-, ep-, kat-, met-, hyp-ではないことである。だから接頭辞の末尾の母音が消滅しなければ子音接触が起こらない筈で、なぜ末尾の母音が消滅したかはまじめに説明しなければならない。それはこうである: まず祖語段階での語本体の初頭音として考えられた y-, s-, w- のうちで y- は[ɣ]を通り[ʃ]を通して[ɣ]になったと考える。「温新知故」であるが、これにはフランス語からスウェーデン語への借用語の例がある。geni[ɕeni:], chef[ɕef]など。先程挙げた sj-, skj-, stj-, sk+前舌母音の場合に現れる[ɣ]も、スプリングから見て、[ɸ]或いは[sc]の段階を経て一旦[ʃ]になり、比較的近代になってから今の音価になったと思われる。だから印欧祖語から古典ギリシャ語に移行するどこかの過程で y- が ɣ- を経て ɣ- になったという考えも納得できよう。さらに、摩擦音の乏しかった印欧祖語では本来の s もかなり自由な、広い異音にわたって分布することができたと考えられ、現代の[s]よりもむしろ[ʃ]に近い音価だったと考える方が、いわゆる rhotacism※、つまりラテン語やゲルマン語に見られる s-(ɣ)-r 交替をよりよく説明することができる【※genus—generis; tempus—temporis; was—were】。そして wr- の子音接触における w- は後続音に同化されてすなわち r- になったであろう。だから、のちに h となる有気記号の位置に或る段階ではすべて/ɣ/があったと信じてよい。

hが口腔閉鎖や狭窄とまったく無縁な声門音であるのに対して、sは3カ所での狭窄に関係する最も口腔の関与の大きい音声である。つまり前者が口腔調音的には母音であるのに対して、後者は最も母音と相性の悪い子音である。だからこそ後代にhに変わってしまうのであるが、sがsでいるうちは「三所狭め」の抵抗に逆らう強い呼気をもつ子音であるから、母音を「吹き飛ばして」しまうような性質をもっていたと考えられる。無声子音に挟まれた母音はまず無声化され、ついでsに同化されて、1モーラの長さをもつsに変わったかもしれない。この段階で前述の接頭辞は ap_s:-, ep_s:-, kat_s:-, met_s:-, hyp_s:- になるであろう。[ただしwr-由来のsr-は先行母音を吹き飛ばさなかった。呼気が弱く、母音の後半を少しr化したからである。]

ついで異音の選択が起こる。以前述べたように/s/には先行する子音に適応した3種の異音があるから、接頭辞は ap_ϕ:-, ep_ϕ:-, kat_ϕ:-, met_ϕ:-, hyp_ϕ:-の形になる筈である。kが関係する接頭辞はないが、後倚辞としての否定辞 ov, ovk というのがあり、それが有気母音の前では ovx となるので、これは oukx- と解釈でき、ここのxもまた/s/の異音と見なし得る。tに後続するrはtの同化作用を受けて舌尖が次第に前進した調音に変わり、rからsを経てθに落ち着いたと考えられる。従って kat_ϕ:-, met_ϕ:- は katθ:-, metθ:-に変わったわけである。以上の過程でできたϕ, θは1モーラ（短母音1個に相当する音長）をもっていた【:はそれを示す】のであるが、やがてそれを失い、先行する子音と融合して破擦音になったと思われる。

以上の過程でできた複合動詞の例を若干挙げると ^cλημι (放つ。-mi は1人称単数語尾) が接頭辞 απο- (分離を表わす。英語offやドイツ語 ab と同源) と結合した αφλημι, また κατα- (下へ) と結合した καθημι (降ろす、落とす) などがある。以上の過程ですでに無声破擦音ができていたことは、有声破擦音を誘引する場を提供したわけである。

8. 無声破擦音が有声破擦音を誘引し吸収合併した

今までの話で、ギリシャ語には印欧祖語から受け継いだ第Ⅱ系列の有声破裂音に淵源をもつ有声破擦音 b^h, d^h, g^hがあり、別のルートで発生した無声破擦音 p^h, t^h, k^hもあった、という趣旨を述べた。それら2系列の破擦音が同時に並列存在していた時期がギリシャ語史上あったと仮定しよう。すると、それらの2系列は同じ形態上の位置に現れて競合することはない。前者は語根或いは形態素の内部のみに現れ、後者は形態素の境界のみに現れる。形態素の意識は当時のギリシャ語人にとって明瞭であったから、2系列を区別する有声／無声のcriterion はあまり重要な働きをしなかった、と言えよう。

一部の学者が主張するように確かに破擦音という音声のジャンルに関する限り無声音の方が無徴であるが、言語史の一時期に限れば、有声破擦音の方が優勢だったという状況があったかもしれない。しかし有声破擦音の方は印欧祖語からの相続遺産のため数が増えず、無声破擦音の方が形態素の衝突によって数の上で前者を圧倒するようになったとすると、多数派の方が少数派のモデルとなり、無声側が有声側を吸収合併する事態も起こり得る。

そのような事態が実際に起こったとすると、 b° , d° , g° は無声の p° , t° , k° に取り替えられることになる。確かに言語史的に見れば「変化」であるが、思うに、世代を経るに従って、有声破擦音を使うべきところに無声破擦音を使う人が増えた、ということであろう。こうして古典ギリシャ語時代には ϕ , θ , χ は無声破擦音の音価をもち、新約聖書が書かれた頃かどうかは知らないが、ある時期以降は破裂音成分が衰退して摩擦音になり、現代ギリシャ語に至る、という音韻史の一部を私流に構築することができた。

9. まとめと発展、展望、「温新知故」の効用など

さて、以上の話で主役を演じたのはスウェーデン語などに現れる「三所攻め摩擦音 ɣ 」であった。もちろん Gamkrelidze & Ivanov の「声門説」に基づく印欧祖語の子音体系の見直しがあればこそ、の話であるが、もし ɣ という主役がいなかったらギリシャ語に無声破擦音が発達せず、それをモデルとして印欧祖語由来の有声破擦音が無声化することもなく、第Ⅱ系列の有声破裂音はサンスクリット或いはその現代の娘言語ヒンディー語のように、murmured releaseを伴った有声子音の段階に留まったであろう。しかしこれほどの業績を残した ɣ なのに、母音前では恐らく $[x]$ を経て h に変わり、 h はさらに母音間で消失し、ついに現代ギリシャ語ではロマンス諸語のように語頭でも消滅してしまった。

ここで別の言語の話になるが、以上の話や議論の進め方を、たとえば《スペイン語で j がなぜ $[x]$ と発音されるようになったか》ということの説明に應用すると面白い。恐らく $[j \rightarrow \text{ɣ} \rightarrow \text{ɣ} \rightarrow \text{ɣ} \rightarrow x]$ の道筋を辿った筈である。もちろん俗ラテン語 *occlus* に発する *ojo* (眼) などには $[k_l \rightarrow k \rightarrow g \rightarrow \text{ɣ} \rightarrow j]$ という前史も付けての話であるが、要するに $[j]$ の段階を経て、そこから第Ⅰの道筋を辿っている。また $[(\text{ɣ} \rightarrow) j \rightarrow \text{ɣ}]$ という音変化はスペイン語の広い範囲にわたる方言に現在起こりつつある変化でもある。逆に困難を抱えているのが外来語の $[d\text{ʒ}]$ の発音で、彼らは概ね $[t\text{ʃ}]$ で置き換える。このことはギリシャ語史で有声破擦音が無声破擦音に同化されたという見解の傍証になるであろう。

参考文献

- ☆ Gamkrelidze & Ivanov [1984] *Indoeuropejskij jazyk i indoeuropejcy*. vol. 1
- ☆ 山口 巖 [1995] 『類型学序説』 京都大学学術出版会 京都
- ☆ 古川晴風 [1966] 『ギリシャ語四週間』第8版 大学書林 東京
- ☆ 横山民司 [1978] 『スウェーデン語の入門』 白水社 東京
- ★ " 同著に付属する録音テープ（模範発音と朗読）。
- ☆ 田原 薫 (1982) 「印欧祖語の音声に関する一考察」『言語表現研究』第1号、兵庫教育大学言語表現学会 兵庫
- ☆ 田原 薫 (2001) 「新世紀に嘱望する言語学の若干の問題 — 私的な興味にまかせて拾い上げた4題断」『ニダバ』第30号 pp. 152~161, 西日本言語学会 広島